発刊にあたって　― 千万年の後までも続く友情を ―

荒尾市宮崎兄弟資料館とシンガポール孫中山南洋紀念館・晩晴園との最初の出会いは、2012 年でした。2012 年 2 月 15 日、神戸の孫文記念館からの紹介を経て、晩晴園訪問団が来荒され、その後、2013 年に晩晴園で計画されていた特別企画展「海外逢知音　孫中山、シンガポールと日本」開催に向けて、交流が行われるようになりました。孫文が日本に残した史料を収集するため、何度も荒尾市を訪ねられ、史料所蔵者との連絡や関係者への出品協力依頼などを重ねるなかで、両館のあいだで人と人との交流も重ねられ、私たちはその絆を強くしていきました。企画展には荒尾市からも史料を出品し、これらの積み重ねが両館の友好関係の礎となりました。

こうして、2014 年 9 月 25 日、両館は「孫文と日本の友人である宮崎滔天との歴史的関係と深い友誼を礎として、先達たちが築き上げた深い友情に対する理解を一般市民に広げ、両国の友好関係を推進するため」、両館提携についての基本協定書を締結しました。以後、両館はこの協定書に基づいて、レプリカ史料の交換や学術交流を行い、共同報告書の発刊という共通の目標に向けて共に取り組んできました。そして、ここにようやく、共同報告書「日本からシンガポールへ―宮崎兄弟と孫文と辛亥革命―」を無事に発刊することができました。

本報告書のⅠ.「孫文・宮崎滔天・晩晴園」は、シンガポール及びマレーシアで著名な歴史学者であり、晩晴園の学術委員の柯木林氏が執筆しました。柯氏の論説では、孫文の革命運動におけるシンガポールと晩晴園の位置づけについて、また初期の日本人コミュニティの歴史と、宮崎滔天とシンガポールとの関係について紹介しています。

続くⅡ.「孫文と宮崎滔天―その出会いと友情」では、荒尾・宮崎家の歴史をはじめ、宮崎兄弟、特に宮崎民蔵・滔天と孫文の交流の歴史について、さらに宮崎滔天の孫文革命運動支援におけるシンガポールの位置づけについて紹介しています。

この共同報告書発刊により当初の目標を達成するに至ったわけですが、これは決して終わりではなく、むしろ両館の絆をさらに強める前奏であり、また今後の両館の関係発展における重要なマイルストーンだと考えています。宮崎兄弟と孫文の友情のように、今までよりさらに深く、広く、そして多様な交流や協力ができるよう祈念しつつ、本報告書の発刊に至るまでに御協力いただいた多くの方々に、この場をお借りしまして、心よりお礼を申し上げます。本書をとおして、シンガポール、そして日本の多くの方々に、両館の魅力とその歴史的価値、そして現代的価値の一端を知っていただくことができれば幸いです。

荒尾市宮崎兄弟資料館
シンガポール孫中山南洋紀念館　晩晴園

目次

発刊にあたって

Ⅰ．孫文・宮崎滔天・晩晴園 ―― 4 頁

1）20 世紀初期シンガポールにおける日本人コミュニティ　5 頁

2）シンガポールにおける革命活動 ―― 14 頁

3）海外における孫文の革命基地 ―― 16 頁

4）シンガポールにおける宮崎滔天 ―― 18 頁

結び ―― 20 頁

Ⅱ．孫文と宮崎滔天―その出会いと友情

1）「宮崎兄弟」の源流 ―― 21 頁

2）近代日本と宮崎八郎 ―― 22 頁

3）土地均享論者・民蔵と革命的アジア主義者・彌蔵 ―― 23 頁

4）「東亜の珍宝」孫文と滔天邂逅 ―― 26 頁

5）革命運動におけるシンガポールと荒尾 ―― 30 頁

Ⅲ．施設紹介：シンガポール孫中山南洋紀念館　晩晴園 ―― 32 頁

Ⅳ．施設紹介：宮崎兄弟資料館（熊本県荒尾市） ―― 35 頁

脚注 ―― 37 頁

参考文献

日本からシンガポールへ
―宮崎兄弟と孫文と辛亥革命―

Ⅰ．孫文・宮崎滔天・晩晴園

1929 年 5 月 25 日、林義順（1879-1936）は上海で、自筆の署名入りの写真を宮崎滔天の妻・ツチに贈った。このとき宮崎滔天（1871-1922）が他界してすでに 7 年が経っていた。林義順のこの行動は、滔天に対する友情を示すものである。

林義順がツチに写真を贈った三年後の 1932 年、彼が北平（現在の北京）を旅していたとき、『民国日報』の記者がわざわざその宿泊先を訪ね、北京崇文門外手帕胡同 46 号の李という友人宅で彼と面会した。当時林義順は孫文についてこう語っている。「かつて孫総理（孫文）が革命を提唱したころ」、「金もなければ兵もなく一艘の軍艦もなかった」。「しかし彼は専制政治を転覆させ、民国を成立させることができた」。「これは当時の同志たちが、揺るぎない決意を持ち、彼の主張を擁護したためにほかならない」と[1]。このとき、辛亥革命の成功からすでに 21 年が経っていた。

林義順が自筆で署名し宮崎滔天夫人・ツチに贈った写真（1929 年）
〔提供：宮崎黄石氏〕

上述の二つのことは、孫文が主導した辛亥革命に対する、また革命事業を支持した日本の友人に対する林義順の熱い思いのみならず、孫文が海外の華人に与えた影響の大きさを物語っている。

林義順の本籍は広東省澄海県岐山鎮馬西村（現在は汕頭市に属する）[2]、シンガポールで生まれ育った華人であり、孫文の忠義深い追随者であった。孫文がシンガポールに滞在していたとき、林義順は彼の叔父であり、晩晴園の主人である張永福（1871-1959）、商人の陳楚楠（1884-1971）らとともに、経済面と精神面で孫文を支援した。林義順も生命の危険を冒しつつ、閩南（現福建省の南部）、潮州・梅洲（ともに現広東省東北部）の各所に革命の宣伝品を配布し、華南地域の反清革命運動を助け、ついに中国近代史における 1907 年の黄岡蜂起（黄岡は福建省と広東省の境界に位置する）が成ったのである[3]。

孫文、宮崎滔天、張永福、林義順、陳楚楠、彼らは異なる国からどのようにして同じ道を歩むまでに至ったのか。本論の主な目的は、彼らの関係を整理し、そこから当時のシンガポール、中国、日本という三つの地の関連性をとらえることである。

1）20 世紀初期シンガポールにおける日本人コミュニティ

シンガポールは南海の片隅にあり、赤道からわずか 138 キロに位置する国である。ここは一年を通して灼熱の夏の気候で、いわゆる「南洋の未開の国、樹木生い茂る病気になりやすい地」である。しかしその地理的優位性により、ラッフルズ上陸前の 500 年にわたって、シンガポール島にはすでに華人が居住し、泉州と通商していた[4]。

19 世紀中葉、西洋人の到来に伴い、日本は開国を迫られ、西欧列強との通商を強要された。明治維新と呼ばれる諸改革により、日本は日増しに強国へと成長していった。これと同時に、日本と世界との接触も日増しに増加した。一方、東西の海の貿易の中心であったシンガポールには、各地から外航船や移民が貿易や新生活を求めて集まってきた。これら新たにやってきた移民の中には、日本人も含まれていた。

日本人がいつシンガポールに渡ってきたのかについての考証はすでに不可能である。しかし、早期の日本人社会集団によるシンガポールでの活動はさほど輝かしいものではなかった。19 世紀中葉から第一次世界大戦の終了の時期、シンガポールにやってきた日本の移民のなかには、「からゆきさん」と呼ばれる日本人娼婦がいた。からゆきさんは多くが九州（長崎や熊本を含む）の貧困家庭の出身だった[5]。シンガポールに渡った後は売春を生業とし、この地で客死する者も少なくなかった。これは、シンガポールの日本人墓地がなぜ娼館経営者の出資で建てられたのか、その理由を説明してくれる[6]。

シンガポール・マレーシア地域の経済発展は、多くの日本人を引きつけ、移民の増加へとつながった。統計によれば[7]、1889 年、すなわち日本政府がシンガポール領事館を設立してから 10 年間のうちに、シンガポールに滞在する日本人人口は約 2,690 人となった[8]。1891 年から 1911 年の 20 年間で、海峡植民地（1826-1942；1945-1946）[9] の日本人人口は激増し、このうちシンガポールでの増加が最も顕著であった。

（表一）：海峡植民地とマラヤ連邦における日本人人口分布表（1891-1911）

	1891 年			1901 年			1911 年		
シンガポール	男	58	287	男	188	766	男	514	1427
	女	229		女	578		女	913	
ペナン	男	1	21	男	26	238	男	-	266
	女	20		女	212		女	-	
マラッカ	男	2	17	男	10	20	男	-	92
	女	15		女	10		女	-	
ペラック	男	4	32	男	23	198	男	125	754
	女	28		女	175		女	629	
セランゴール	男	8	68	男	47	233	男	116	695
	女	60		女	186		女	579	
ヌグリスンビラン	男	2	14	男	15	56	男	71	333
	女	12		女	41		女	262	
パハン	男	-	6	男	2	48	男	25	247
	女	-		女	46		女	222	

資料出典：
1. E.M>Merewether, Report on the Census of the Straits Settlements taken on 5th April,1891;
2. George T. Hare, Federated Malay States, Census of the Population,1901;
3. A.M.Pountney, The Census of the Federated Malay States, 1911;
4. J.E. Nathan, The Census of British Malaya, 1921.
Yuen Choy Leng, "The Japanese Community in Malaya before the Pacific War: Its Genesis and Growth" , Journal of Southeast Asian Studies, Vol 9, No 2, Japan and the Western Powers in Southeast Asia（Sep.1978）, Cambridge University Press、165 頁より転載。

シンガポールに開店した百貨店・越後屋支店（1907 年）【提供：シンガポール国家档案館】

統計図表中のほぼ半数の日本人がシンガポール在住である[10]。当時、シンガポールの日本人は主に医薬、歯科、撮影、映画上映および錫鉱山、ゴム栽培などを生業としていた。日本人が経営する小売商店は多くがミドル・ロード、ハイラム・ストリート、マレー・ストリートやマラバール・ストリート（すなわち現在のパルコ・ブギス・ジャンクション ）などに分布しており、越後屋などの百貨店もシンガポールに支店を出していた。都旅館、碩田館のような日本旅館はビーチ・ロード[11]にあった。『日本社会百年史』では 1910 年末にシンガポールに在住していた日本人の職業について次のように分類している。

早期のシンガポールに開店した日本の歯科診療所、場所はヴィクトリア・ストリートと思われる。
（1910 年代）【提供：シンガポール日本人協会史跡資料部】

（表二）：シンガポール在住日本人の職業類別表（1910 年末）

職業	戸数	男	女	計
娼婦			353	353
ゴム栽培業	35	250	15	265
娼館	80		73	73
外国人被雇用者			52	52
飲食店	12	23	11	34
理髪店	8	24	9	33
下宿業	9	15	14	29
医師	4	20	8	28
医薬品販売業	6	23	2	25
宿泊業	4	16	9	25
歯科医	5	14	8	22
食料品雑貨商	5	16	5	21
仲介業	2	14	7	21
洗濯業	4	14	4	18
呉服行商	6	12	3	15
官吏（使用人などを含む）	3	10	4	14
写真業	3	7	6	13
新聞業	2	10	3	13
その他		111	50	161
合計	273	579	636	1215

【出典：日本外務省史料館史料， 杉野一夫主編『日本人社会百年史（1915－2015）』
（シンガポール：日本人会， 2016 年 12 月），p.32。】

（表二）から分かるように、1910 年末までは、娼婦業が依然最多を占めていた。これは 20 年前（1891）に設立された日本人共同墓地が「からゆきさん」を埋葬するために使われていたことを説明するもので、そこには長期的な合理性がみられる。だが、明治維新以降、日本の国家的イメージの改善のため、1915 年 6 月に日本女性が海峡植民地で「不道徳な活動」をすることは禁じられ、現地での日本の売春業はここから衰退の一途をたどる。

1921 年になると、シンガポール・マレーシア地域の日本人コミュニティに明らかな変化が現れた。ゴム栽培業の著しい発展が、多くの日本人商人の渡来を促すこととなったのである[12]。商人集団の渡来は、シンガポールの日本人コミュニティに新たな経済基盤をもたらした。1915 年にはシンガポール日本人会が設立され、日僑の主な交流連携の場となった。日本人は自らの民族文化を熱愛し、教育を重んじ、「われわれが海外へ移民する際には、必ずやわれわれの文明、とりわけ精神の遺産を世界各地に散布しなければならず、また世界の平和と人類の福祉のため貢献しなければならない」[13]と固く信じていた。こうした考えから、彼らは学校と新聞社を設立しており、その初期の動きは第一次世界大戦以前からみることができる。日僑の数こそ少なかったが、「日本人小学校」が早くも 1912 年に創立されたことは、こうした理念が海外移民のコミュニティのなかに浸透していたことを物語っている[14]。

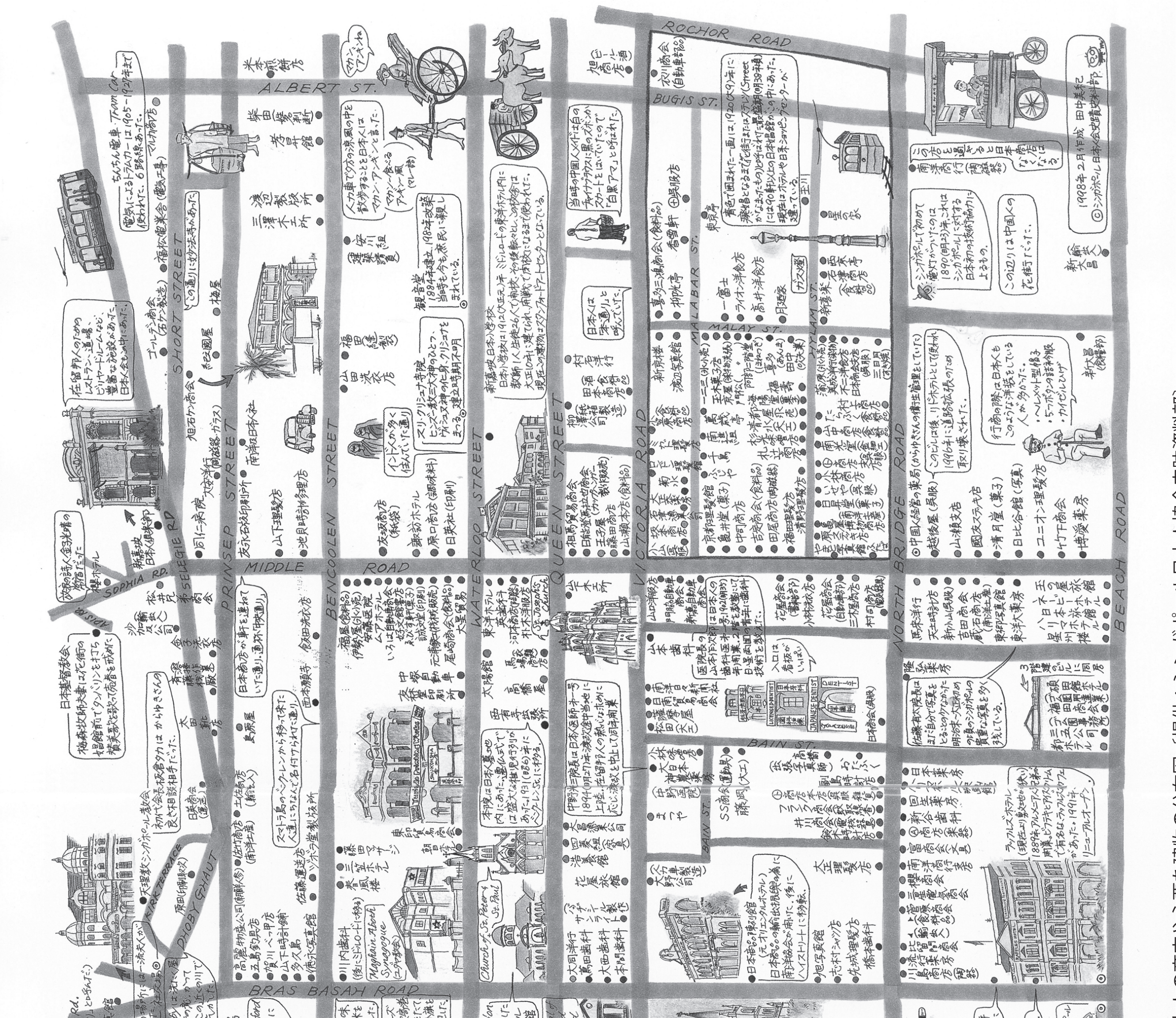
良質な教育体制が整い、一方で文盲率が低かったことが、日本人コミュニティにおける新聞発展の受け皿となった。最初の日本語新聞『南洋日日新聞』は 1914 年に創刊された。その目的は彼らのアジア観を宣伝し、日本の入植文化を提唱することであった[15]。1920 年、外務省直属の東方通信社がシンガポールに支社を設立し[16]、その後さらに英語版の日本の新聞も現地で発行された[17]。これは「日拠時代（1942 年 2 月 15 日 -1945 年 9 月 12 日）」[18]の『昭南日報』発行まで続き、この時点で最高潮に達した。

1879 年 4 月、日本人の人口増加に伴い、日本政府はシンガポールに領事館を設置した[19]。しかしその領事は胡亜基（別名黄埔氏）という著名な華人社会集団のリーダーであり、ロシアと清朝領事も兼任していた[20]。1880 年に胡亜基が没してから[21]は領事の職位は宙に浮き、1889 年になってようやく中川恒次郎が領事代理に任命され、領事館の所在地はソフィア・ロードへ移転した[22]。

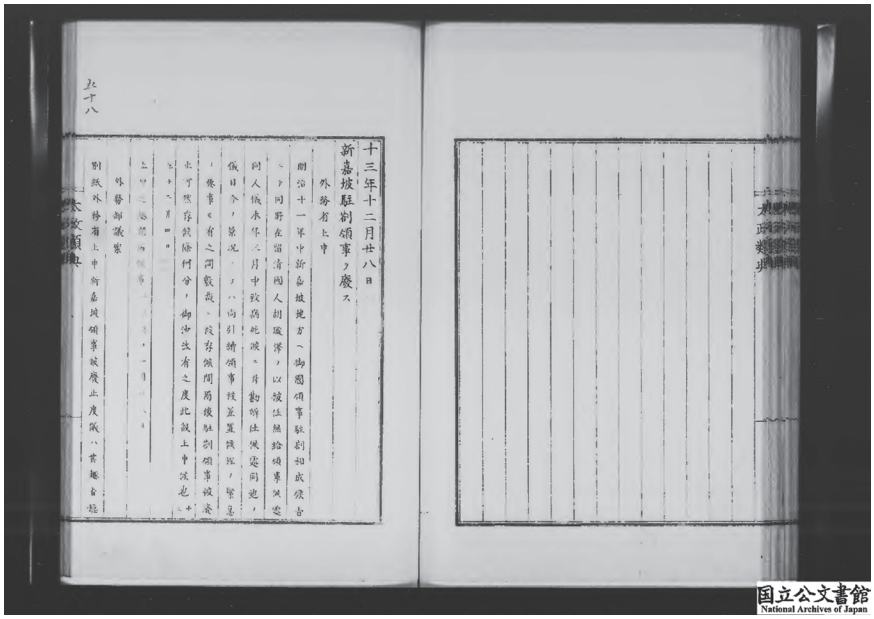
資料によれば、山本音吉（1819-1867）は 1862 年にシンガポールに渡来しており、彼がシンガポールに定住した最初の日本人と言われている[23]。

また、かつてシンガポールに滞在した日本の著名人に梅屋庄吉（1868-1934）がいる。長崎出身で、日活株式会社の創始者であり、裕福な家庭に育った。1895 年に香港で孫文と知り合い、すぐに意気投合し、「君は兵を挙げよ、我は財をもって支援す」ことを承諾した。彼は孫文の革命事業のために航空機などの武器を購入し、日本で中国人飛行士を育成した。武昌蜂起の際にも、孫文のために実録映画を撮影しているが、これは極めて貴重な辛亥革命の記録となっている。彼は孫文の戦友であり、金銭面のみならず、精神面でも孫文を支援し、またさらに繊細な部分、すなわち孫文の愛情の世界までも支えたことは、胸を打つものがある。1915 年 10 月 25 日、孫文と宋慶齢が日本で披露宴をおこなった場所は、梅屋庄吉の自宅であった。梅屋庄吉と孫文は義兄弟の契りを交わし、梅屋夫人と宋慶齢は義姉妹の契りを交わした[24]。

1904 年から 1905 年の間、梅屋庄吉はシンガポールに居住し、ビーチ・ロードで写真館を開いた。梅屋庄吉の曾孫・小坂文乃氏によれば、梅屋庄吉写真館の具体的位置



シンガポール在住日本人の商店や主要な建物の分布図［提供：シンガポール日本人協会史跡資料部］



『太政類典』外務省上申『シンガポール駐箚領事の廃止』（明治十三年十二月二十八日）。「在留清国人胡璇澤、無給で領事に任命」との記載がある。【提供：日本国立公文書館】

は彼が当時宿泊していた硯田館の付近であったという。硯田館の旧住所はビーチ・ロード 21 号で、現在のビーチ・ロード 15 号一帯である。革命党の志士たちの協力のもと、梅屋庄吉は劇場を設立した。孫文の死後、梅屋庄吉は七体の孫文の銅像を鋳造し、六体は中国に贈呈、一体は日本に遺す計画であったが、資金面の問題で四体しか完成しなかった。梅屋庄吉はまた『大孫文』という映画を撮影することも構想していたが、1931 年の満州事変の影響で実現はならなかった。1934 年 11 月 23 日、梅屋庄吉は末期がんのため没した。享年 65 歳であった[25]。

シンガポール日僑のなかでは、中野光三（1869-1923）も非常に著名な人物である。彼は当時のシンガポール日本社会集団のリーダーの一人であり、また改革派（例えば 1900 年にシンガポールに亡命した康有為）や革命派（例えばクアラルンプールの陸秋傑）らとも親交があった。中野光三は 1869 年、日本の福岡県久留米市に生まれ、日本で医学の学位を取得後、1893 年に上海へ赴き、その後シンガポールに定住した。1894 年、ヴィクトリア・ストリート 391 号に東亜医院を設立し、シンガポール初の日本籍の医師となった。1904 年、彼は診療所をヴィクトリア・ロード 46 号に移転し、日本神農大薬房と改称した。医療に従事したほか、自らゴム栽培にも投資し、現地の日本人コミュニティの事務と活動にも積極的にかかわった。1908 年にシンガポール青年会を創設し、1912 年には日本人小学校の創立も支援した。1923 年に没し、その一年後、シンガポール日本人社会集団が共同で彼のために日本人墓地に碑を建て、現地コミュニティに対するその貢献を称えた[26]。

また、西村竹四郎（1871-1942）は 1871 年に日本の福岡県久留米市で生まれた。彼は東京帝国大学・医学部を卒業後、上海、漢口に赴き、1902 年にシンガポールに渡った。西村は 40 年にわたりシンガポールに定住して仕事をし、同盟会シンガポール分会会長を務

めた張永福とは気心の知れた友人であった。1925 年 3 月 23 日の『叻報』には、西村が同徳書報社に招かれて孫文の追悼式で述べた追悼の辞が掲載されている。1936 年に出版された西村竹四郎の回想録『シンガポール三十五年』には、西村と孫文、また張永福ら同盟会シンガポール分会会員との繋がりが記されている[27]。

だが、19 世紀中葉から 20 世紀初期の 50 年の間で、シンガポールでの日本人の活動のうち最も興味深いのは、宮崎滔天の渡来と逮捕、強制出国に関する出来事である。これは一つの重要な歴史的事件となったが、詳しくは後述する。